

# 春燈

3月号

March 2012



主宰の句

安立公彦

群青の礮馭慮島や初筑波

冬夕焼雲は雲どち彩重ね

小寒や早や点しある宵の路地

寒昂亡き誰彼のこゑ聞こゆ

明日を約す茜の空や日脚伸ぶ



# 恋文のごとく書き溜め牡丹の句

『午前午後』昭和四十五年

「このところむやみやたらと牡丹の句をつくつてきた」とおっしゃる通り師には牡丹の句が多い。だが「概ねは牡丹の芽を愛し花を愛する自分<sub>を</sub>を詠っているようだ」とも。しかし又「俳」の窮極の境地は「私」から出発して「私」を忘れた先に在るのではないだろうか。「忘我」の境地と言い換えてもよい。と「安住敦の世界」で述べていらっしゃる。「俳」とは何ともはや奥が深い。

綱 徳 女

# 神将冬円陣なして手は組まず

『柿の木坂雑唱』昭和五十年

「新薬師寺」の前書きがある。法起寺、白毫寺、法輪寺と、奈良の古刹を巡られた折の御句であろう。大きな御目の薬師如来を囲んで、或いは雁の列を見ようと手を翳し、肩掛を伊達に結び、弓手の剣で萩を刈る。傑作は斎の栗飯を飽食して睡くなり、大口を開く忿怒像があるかと思えば、猪が来るぞと金剛杵を振るなど、十二神将の佇まいをユーモラスに描く十二句が続いている。

生田高子

# 燈下集



○ 鈴木榮子

除夜の鐘並びて撞きて尼僧寺  
寒柝や隣家を折れて柝遠音  
水谷右京のドラマのファンや初珈琲  
父は背に切火を切られ初出勤  
初芝居播磨屋三代めでたけれ

○ 片桐てい女

薬喰下戸は大方句が不味し  
社会鍋夢まだ捨てぬ似顔描き  
煤掃いて「忘年」の語をつつしめり  
日本一の養蚕県と詠むかるた  
副作用承知の薬嚙む寒夜

○ 西川保子

冬濤音夜つびて句碑に届きぬむ（赤間神宮）  
ここに絶えし平家一門冬鷗  
冬麗の海へ目を遣り一周忌（弟）  
チエンバロの脚美しき聖夜かな  
数へ日や天井敷敷にバツハ聴き

○ 上山永晃

三の酉四の五の言はず参りやんせ  
マラー聴くマフラーに首埋めつつ  
櫻桃子忌冬の日射の晴男  
そつと来し吉報暮れの仕舞風呂  
伊勢海老や重装備にて且つまた敏

○ 清水美子

空濠の哀史を灯す帰り花  
雪蛭己が白さに酔うてをり  
飛び石につまづく風や竜の玉  
木道のかそけき流れ冬木の芽  
冬の池うごめく命ありにけり

○ 片山博介

開戦の日のしみじみと葱青し  
風に聴く魔王の歌や枯木道  
北風に吹落されて地下酒場  
指白く『死者の書』を繰る霜夜かな  
胸に抱く三日月白し熊眠る

○ 宮沢治子

十二月八日真赤な月の昇りけり  
大マスク夫と気付かず擦れちがふ  
日向ぼこ誰も良き顔してをりぬ  
古曆捨てるに惜しきちひろの絵  
笹子鳴く一口にたる京干菓子

○ 府川昭子

熟れ柿をいただきますと鶉の鳴く  
木守柿雨の日暮となりにけり  
水仙のすつくと立つる気品かな  
残照を溶かし込みたる冬霞  
浮雲のあつけらかんと年詰まる

○ 永島雅子

出格子のつづく家並枇杷の花  
島影を遠く押しやる冬の霧  
雑木林冬日のはだら踏みゆけり  
贗作を承知の壺や初座敷  
スカイツリー窓に昼餉の二日かな

○ 鈴木撫足

雪吊や三角函数忘れけり  
遁甲の術皆伝や枯蟪蛄  
羽子板市今年の顔の楽しみに  
入れ替り柚子転げ出づ湯船かな  
想ひ出の零るるがごと竜の玉

春燈賞（抄） 25句自選

矢口笑子

参道の一直線の淑気かな

恵方道思はぬ方へ曲がりけり

何といふ事も無けれど春隣

花桃や恋するならば右大臣

女には女の秘密雛の酒

気持ち良く騙されてをり春の夢

三月の寒さを言ひて別れけり

屈託は風にあづけて青き踏む

とりあへず無事の報せや初燕

縋れやすきパソコンコード四月馬鹿

ひらめきの疎かならず蜂光る

三伏や極彩色の中華街

ジューパンの堅き乾きや信長忌

太陽の雫ふりまく水着かな

真つ白な雲の造形ソーダ水

海暮れて心許なき素足かな

一水の調べ豊かに今朝の秋

芯硬きシャープペンシル涼新た

光年の遠距離恋愛愛星今宵

やはらかく肩抱かるや秋風裡

豊年や押されて痛き足のつぼ

ハロウィンの魔女の呪文や大南瓜

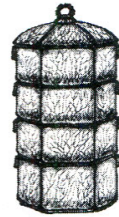
小春日やたはむれに引く恋神籤

宴会の帰り道連れ風邪の神

短針を追ふ長針や晦日蕎麦

# 当月集

安立 公彦選



○ 都丸美陽子

歳晩や曲がつてみたき路地の町  
人の住む気配はみえず枇杷の花  
別荘の水柱かがやく湖畔かな  
藪柑子水門の水ほとぼしる  
おがくづの残る切株春を待つ

○ 松山三千江

自分史など書く気もなくして噓せり  
生き方を変へてもみだし師走風  
煤払ひなどなき旅のひとひかな  
初春や空港ロビーの江戸囃子  
箱根駅伝ピストル役の深呼吸

○ 赤羽陽子

冬空を押し上げてゐる楠大樹  
極月や日差し明るき八幡宮  
石路咲くや寺町にある小学校  
水清き川面に二羽の浮寝鳥  
柊の花軽やかに咲きにけり

○ 矢口笑子

冬林檎齧るベンチやレノンの忌  
時雨るるや視力検査のCの向き  
家中を走る掃除機日短か  
きりきりと束ぬる髪や大晦日  
嫁姑ほどよき距離の若菜かな

○ 藤原若菜

初霜の明日へ磨く心かな  
急行を待つ鈍行や冬の雨  
枇杷の花言葉少なき寧けさに  
冬の月丹をまといつつ蝕に入る  
蛇口より水垂直に去年今年

# 春燈の句

安立 公彦選

ひかりつつ散りゆく冬の黄葉かな

千葉 海村 禮子

銀のカフスボタンや漱石忌

極月や着水の鳥しづく波

冬の日をゆたに受けつつ玻璃磨く

殿と気付く師走の駅出口

神奈川 石田 康明

歯医者より築地へまはる年用意

短日のバス定刻を違へず来

死するより生くるが難し近松忌

笑み湛ふ一茶の坐像冬ぬくし

(炎天寺四句)

東京 佐藤 玲子

小春日や瘦身一茶の足何文

威儀正す大福蛙冬日向

とりどりの落葉の嵩や外厨

松籟に孤鴉ひと声の淑気かな

昂りもあきらめ無く滝凍つる

千葉 神田 恵琳

産土神の松韻ゆたか初詣

襟元をただし隣家へ御慶かな

こきりこの流れてゐたる鯰の宿

初鯰の糶に声飛ぶ熱気飛ぶ

煌めきを裁つて水尾曳く番鴨

(箱根ガラスの森)

日の光碎きて潜く鳩

数へ日の日差だいじに使ひけり

床の間の「凜」の一字や去年今年

半衿の刺繍寿ぐけふの春

ランナーに二日の富士の美し厳し

初霜や鳥の素通る実の上に

寒舁挑む眼ひそむ男の子かな

黒髪を束ね始むる寒稽古

明日への息のぬくもり冬夕焼

千葉 吉村さよ子

神奈川 浅木 ノエ

兵庫 伊藤 百江



# 余言

安立公彦

夕しぐれ鷗外漁史の胸像に

西川 保子

「漁史」は文人の雅号の下に添える語。近代以降の文人の中で、まこと漁史の名にふさわしい作家は鷗外森林太郎を最とする。「鷗外漁史」の響きもいい。

この句、その鷗外の胸像に折からしぐれが降りかかったという。一句の形もその胸像を目交にするかに姿正しい。なお鷗外の墓所は三鷹駅南口の禅林寺にある。墓石の銘は「森林太郎墓」のみ。これが鷗外の遺言によることは周知の通りだ。蛇足ながら鷗外を師と仰ぐ太宰治の墓は、鷗外の墓の斜め向かいにある。

時雨忌や花入の銘旅枕

佐藤 信子

この句も格調の高い作品だ。俳諧の祖とも言うべき芭蕉が、大阪御堂筋の花屋仁右衛門方で没したのは元禄七年十月十二日。一三八年前のことであつた。享年五十一歳は今から考えると若い。わが春燈の祖は芭蕉忌をどう詠んでいるのか。へむさしのの寺のト間の桃青忌 万太郎。この句「上野清水堂にて」の前書がある。へ旅一夜明けて翁の忌なりけり 敦。これは松島芭蕉祭での句。

掲出句。「花入」は「花器」、その銘は「旅枕」。松尾芭蕉が生涯を通して追求した「蕉風」の背景とも言うべき「旅」への思いをこめた」句である。「や」切れ「名詞」止めという本格的な表現が、この句を動かし難い」句に仕立てている。

かばひ合ふかに重なりぬ朴落葉

柴崎 富子

初夏、高枝に咲く朴の花は白花九弁の香気を放つ。初冬になると大きなその葉は乾き、朴の落葉は樹下を歩む人の足裏で、黙考を驚かすかに大きな音を立てて崩れる。

作者はふと視野に、その落葉の重なり合っているのを見る。それはあたかも落葉した朴の葉が、お互いを庇っているかのように見えるのだった。落葉という自然の摂理を、有心のものと見る作者の優しさは、同時に俳句のこころを言い止めているとも言えよう。

車椅子の高さほどよき草紅葉

井上 春子

最近「車椅子」の句をよく見かけるようになった。それは車椅子を利用する人の多さを示すものでもある。しかしその大方は対象としての車椅子だ。

作者はリハビリのために車椅子を使っていると聞く。だがそのリハビリを作者は嘆いてはいない。むしろリハビリを肯定し、つとめて外気に触れる。「高さはどよき」にその思いがよく出ている。前向きな姿勢が、しかし何気ない表現で詠まれ、みごとに一句となっている。

長き夜を座り直して受話器取る

長浜 徳三

作者は昨年八月、年賀状と俳句の版画展を開催、多くの来場者を得て盛会裡に終了した。その版画の賀状は私も頂いているが、印刷が大方を占める中で、手彫りの年賀状は如何にも初春を言祝ぐゆかしさに満ちている。

この句、余程大事な用向きの電話なのだろう。「座り直して」に電話の相手との関りがよく出ている。事は「受話器取る」だけの内容だが、そういう日常の些事にうた心を見出すことも、大切な句作の一法である。

短日やふつと消えたる己が影

鷹崎由末子

この「影」は氣象現象としての影ではない。心象風景の中に浮かび消えゆく影である。それは面影であり、また或ると

きは翳りであるかも知れない。感情と言うほどの情念ではないが、創作には欠くことの出来ない心象である。

私たちは日々暮しの中で、この句のように或るものが「ふつ」と浮かびまた消えることをよく経験する。それはまさに俳句への糸口である。この句はそのことを良く実証している。ただし表現の具体性は欠かせない。

小生とつづやいてみる小春かな

小嶋 恵美

この句を見て思わず笑みがこぼれた。「小生」は男子が自分を指して使う謙称。作者とは年に二回会うか会わないかだが、いかにも女性らしい物腰の女流だ。その作者がある日ある時、ふと「小生」と呟く。前後の関りは分からないが、「つづやいてみる」だから意識しての「小生」だろう。女性が男性の言葉を使うのは、場合によっては或る意味で新鮮だ。この句に浮かぶユーモアもその一つ。

生きてゐる影を落として冬の蝶

佐橋 敏子

三冬を生き伸びている昆虫の中で、蝶はことに哀れふかい。〈落つる葉に撲たる冬の胡蝶かな 几薫〉という句もある。掲出句、冬日に羽を開いている蝶。作者はその蝶の影に、生き物としての冬蝶の哀れをしかと見とどける。その思いの中には、深まる冬の寒さもあろう。「生きてゐる影を落して」が絶妙だ。